

分析形而上学における人格の同一性の検討

—— 人格の同一性は何によって担保されるか ——

坂井賢太郎

1. はじめに

人格の同一性 (personal identity) が現代分析形而上学で盛んに議論されている。これは、現代において脳の科学研究が目覚ましい進歩を遂げたことと無関係ではないだろう。「人格の同一性は何によって担保されるか」この問題はこれまで議論されてきたが、脳科学がこれに新しい局面をもたらしている。脳科学は知覚や記憶などの心的なことがらを脳の働きという物理的な側面から説明し、一定の成果をあげている。このことが現代の形而上学者に様々なインスピレーションを与えているのである。具体的に脳科学の所見から生まれたインスピレーションの一つをあげると、脳分割 (brain-bisection) の思考実験である。人は右脳と左脳を持つ。脳を失って人格を保ったまま生存している人は未だ見出されていないが、右脳あるいは左脳を失っても人格を保って生存しているように見える人は存在する。では、右脳と左脳を別の身体に移植し、それが成功したとすると人格は二つに分岐するのだろうか。詳しくは次節以降で検討するが、既存の人格概念でこれは説明できない。なぜなら、人格の同一性を含む私の心的なことがらは端的に私のものであり他の誰も持つことはできないからである。しかし、脳というものが心的なことがらを引き起こしているならば、心的なことがらが分割・移植が可能であると言える。つまり、人格の分割・移植も可能でありうる。このとき、既存の人格の同一性という概念は維持できるのであろうか。

本稿では、このような状況にある現代の人格の同一性概念についての議論を紹介する。2.1 節でリチャード・スウィンバーンの魂の存在の擁護、2.2 節ではバーナード・ウィリアムズの人格の同一性は身体的基準によるという議論を紹介する。続く 2.3 節でデレク・パーフィットの人格の同一性という概念はそもそも重要ではないという議論を経て、2.4 節でデイヴィッド・ルイスの段階説と関係による人格の同一性概念の説明と順に紹介していく。

2. 「人格の同一性は何によって担保されるか」

前述のように、脳が心的なことがらを引き起こしていると考えれば既存の人格の同一性概念を維持していくのは困難である。このことに対し、脳以外の人格の同一性の担保を見出す、既存の人格の同一性概念を見直すなど論者の反応は様々である。具体的な議論を見ていこう。

2.1 魂説

リチャード・スウィンバーンは、魂は非物質的なものであり、人に属するところの意識的な思考、感覚そして意図はそれがその人の魂に帰せられるために、その人に属すると述べている(Swinburne, 1987, p.34)。そしてその魂の持続が存在することが、人の持続を形成すると語る。人は身体プラス魂で形成されるのだ。ここで魂と呼ばれるのは次のようなものである。人が存在し続ける限り、その人の部分のうちのいくつかは存在し続けなければならない。ここで、その人の身体全てを破壊したとしてもその人が意識的な生を持続けると考えることは論理的に可能である。このときのその人の非物質的な部分を彼は魂と呼ぶ。スウィンバーンは人格の同一性に関して脳科学示す現象を議論することで魂説の擁護を試みる。

脳科学が明らかにしているところでは、右脳はおおむね身体の左半分、左脳は右半分からの情報を受け取る。もし、病気やある手術である患者の両脳半球の主要な神経接続が切断された場合、身体の左半分・右半分からの情報を受け取る主体すなわち人格は一つのままであろうか、それとも二つになってしまうのであろうか。後者の場合、一つの身体の中に二つの人格がいるということになってしまうのであろうか。実際の両脳半球の主要な神経接続が切断された患者の行動が示す証拠では、そのいずれとも解釈することができる。この問題に関してスウィンバーンは、脳科学が進歩しても確かな答えは出ないだろうと考える。なぜなら、その問題は魂に関するものであるからである。脳科学の証拠は身体に関する証拠であり、魂と身体は別の実体であるため、脳科学の証拠では魂に関する問題には答えられないのである(ibid., p.36)。

スウィンバーンの説は「人間は身体プラス魂」であるということである。私の本質的な部分が魂であるならば、身体（脳）はどう位置づけられるのであろうか。彼によると、人の魂はその働き（operation）を脳が作用することに依存している。しかし、その存在は身体に依存していない。身体（脳）は「魂が働くための条件」という風に位置づけられる。

ここまでで、私が読む限りでは、このスウィンバーンにとっての脳分割が示唆する問題は次のようなことだと思われる。脳は科学的に分割可能であると考えられる。このとき、移植後の両方が私である、左脳を持つ者のみ、あるいは右脳を持つ者のみが私である、両方とも私ではない、の四つの場合が考えられる。この場合、私の脳は機能しているが私でない人格が誕生する（移植後両方とも私ではない場合、あるいはいずれかのみが私であり、もう一方は私でない場合）あるいは異なる二つの身体に同時に私という人格が属する（両方が私である場合）という受け容れがたい帰結が生じる。従って、私の本質的な部分は身体的なもの（脳）ではないという議論だと思われる。

このように、スウィンバーンは魂という分割不可能なものに人格を帰属させることによって既存の人格概念を維持する。別の仕方で既存の人格概念を維持しようと試みるのが次に紹介するバーナード・ウィリアムズの議論である。

2.2 身体的連続性説

バーナード・ウィリアムズは身体的同一性が常に人格の同一性の必要条件であると主張する(Williams, 1973, p.1)。物質はあるものとそれと全く似たものを区別することができる。ものの同一性は私達に本質的に与えられている時空的連続性の概念によって可能となる。他方、人格の同一性の場合、身体という物質の時空的連続性の他に記憶や性格が同一性を担保するものの候補として考えられる。しかし記憶や性格は人格の同一性の基準とはならない。なぜなら、両者ともにあるものと全く似た別のものとの区別が明確にはつけられないからである。例えば記憶は次に述べる理由よりあるものと全く似た別のものの区別がつけられないために人格の同一性の担保とはなりえない。

記憶の重要な性質としてウィリアムズは次の2点をあげる。(1) Aが x を覚えているとは、普通の用法ではAが x を知っているということと同様である。(2) 覚えていると主張する全てのことが確証できるわけではない、の2点である。ここで、XがトークンイベントEを目撃し、トークンアクションAを行ったとする。ここで、このXを個別化(individuate)するのはトークンアクションAである。なぜなら、二人の人が同じトークンイベントEを目撃することは論理的に可能であるが、同じトークンアクションAを行うことは論理的に不可能であるからである。しかし、このEがある人を個別化する見込みを高めることもある。それはXがあるトークンアクション $A_1, A_2 \dots$ を行ったことを覚えており、トークンイベント $E_1, E_2 \dots$ を目撃したことも覚えており、それぞれの A_n と E_n が一致する場合である。では、XがAに対応するところのEを覚えていると主張する場合、私たちはどのようにしてそれが本当かどうかチェックできるだろうか。私たちはXがEを目撃してAを行ったことの証拠を見つけなければならない。例えば別の人YがAに対応するところのE'を持っていると主張した場合、どちらがAを行ったと判定できるのだろうか。その判定を下すための証拠は何かの記録か、誰かの記憶の中でXがそのEにおいて「身体的に」そこにいたということになるだろう。結局、この心的な同一性の基準はそれ自体では全く似たものを区別できない場合があり、その動作の担い手すなわちその身体を参照するという身体的な基準に依拠することがありうるのだ。

では、身体的同一性によらず人格の同一性が成立する場合、身体交換(bodily-interchange)の可能性について考えてみよう。王様と農民の身体を交換するために魔術師が雇われたと

する。魔術師が呪文をかけると王様の身体に農民の人格が宿り、農民の身体に王様の人格が宿るというのだ。このとき、例えばそれぞれの声はどのようになるのだろうか。声は明らかに身体的な機能である。身体交換が成功したとすれば、農民の粗野な悪態が王様の教養のある声色で言われるのであろうか、それとも王様の気のきいた冗談が農民のもぐもぐ声でいわれるのであろうか。王様の人格を持ったという農民がどれほど多くの王様の記憶を持っていたとしても、身体交換前の王様と同じ「種類」の人であることの要求を満たすことができなければ農民は王様になることはできないだろう。例えば、王様の特徴的な笑い方ができなければ王様とはみなされないかもしれない。このように、人の人格をその人の身体と区別するとき、私たちは何から何を区別したらよいのか本当には知らないのである。つまりここで言われていることはこういうことであると思う。魔術師が魔法をかけるとき、王様のあるものと農民の何かをそれぞれの身体から切り離して入れ替える。このとき、魔術師は実際には「何を」切り離しているのであろうか。魂を認めようと認めまいとその人であると他人が確証するところの全てを切り離して移し換えなければ人格を交換したということにはならないだろう。このようにして、ウィリアムズは身体を離れて人格の同一性が成り立つという可能性に疑問を投げかけるのである。このようにウィリアムズは人格が同一であると言えるための条件を考え、身体的連続性がその条件であると論じる。

以上見た二つの議論は、人格の同一性を「何か」が担保すると考えている。そもそもこれは正しいのであろうか。同一性とは関係概念であるというところに着目したのが次に見るデレク・パーフィットとデイヴィッド・ルイスの議論である。

2.3 Identity 不要説

パーフィットは人格の同一性という言葉は心的連続性 (psychological continuity) を意味するように使うべきだと考える (Parfit, 1971, p.19)。これまでの議論のように、心的連続性が人格の同一性であると言わないのは、既存の人格の同一性という言葉が使えない場合があるからである。具体的に述べると次のようになる。

パーフィットは人格の同一性は普通、一対一関係であると考ええる。しかし、先のスウィンバーンの議論で挙げた脳分割の思考実験のように、人格の同一性が一対多関係においてもなりたつといたくなる場合も思考可能である。これに対し、彼は次のように考える。一対一関係の場合、心的連続性は人格が同一であると言えるための根拠である。しかし、一対多関係にある場合は心的連続性があってもこれまでと同じ意味で人格が同一であると言うことはできない。しかし、心的連続性は生きる上で重要なことである。それを重視するならば、人格の同一性という言葉を使うことを放棄すべきなのだ。

では、一対多関係においてこの心理的連続性を考えてみよう。ここでパーフィットはq-記憶 (q-memory) という概念を用いてこれを説明する。q-記憶とは誰かが過去に行ったところの経験の記憶を持っているという信念である。簡単に言うと、非人称の経験を想定しているのである。私が私の q-記憶を持っていてそれを q-思い出す場合、その q-記憶が指し示す経験は直接的に私に表れるため「私がした」というだろう。他方、何らかの仕方で他者の q-記憶を私が持ち、それを q-思い出す場合、より間接的な仕方で私にあらわれるため「誰か、多分私がそれをしたのだろう」ということになるだろう。これは他の動詞や動詞の結果にも拡張して考えることができ、q-約束したところの q-約束、q-認識したところの q-認識などと考えることができる。このなかでパーフィットは q-記憶した経験と q-記憶、q-意図することと q-意図した行為のつながりを心的に直接的な関係と考える。

ここでパーフィットは心的関係を区別する。心的に直接的な関係を持っていることを心的連関 (psychological connectedness) と呼び、心的連関が連鎖していることを心的連続 (psychological continuity) と呼ぶ。すなわち、A が q-意図して B が q-行為した場合、両者は心的連関関係にあるといえて、A が q-意図して B が q-行為し、B が q'-意図して C が q'-行為した場合、A,B,C は心的連続関係にあると言える。ここで注意しなくてはいけないのは、心的連関は非推移的で、心的連続は推移的であるということである。というのは、先にあげた A,B,C の場合、A の意図を C が実現したとは必ずしも言えないからである。これに対し心的連続はただ心的連関が連鎖していればいいので推移的なのである。

心的連関は推移的でないため、心的連続の系列の中で近くにあるものは強く、遠くにあるもの同士は弱い関係をもつ。従って、一対多関係にある人格同士の心的関係には強弱の度合がある。

この点は重要である。なぜなら、人格の同一性は全か無かでしか考えられてこなかったからである。心的な関係の強弱は、一対多関係のみならず、一対一関係においても同様に考えることである。例えば永遠の命を持つ存在を考える。彼の心的連続の系列は一対多関係にならないとすると常に一対一関係で推移していく。しかし、彼の心的連関は時がたつにつれ過去のものから順に関係の度合が弱まっていき、ついにはほとんど無いと言えるほどになるだろう。このような心的連関の無い人格を彼は果たして私と言えるだろうか。パーフィットは永遠の命を持つ存在の場合、「私」という語が通常用いられているような有意義な使用を持っていないという。結局は、人格の同一性は度合の問題でありうるので、ある心的連続性があるそれを「私」と呼ぶか「過去の私の人格の一つ」と呼ぶかなどは選択の問題であると答える。

続く論文においてパーフィットはもう一歩進んで人格の同一性は不要であると論じる。具体的な議論に入る前に、グラント・ギレットの Gillette(1995)におけるパーフィットへの批判を見ておこう。パーフィットは人格が一对多関係になりえて、その間でも心的連続性が成り立つと考えられるという思考実験を考えた。そして、その結果を受けて人格の同一性概念の放棄を提案した。ギレットはこの説に対し主に人格概念を決定する「文法的」・概念的関係を探求することで反論を加えようとする。その反論の要旨はこうである。

ギレットが用いるディヴィッド・ウィギンスのカエルの例で説明する。例えば私がオタマジャクシを飼っていて、それが見ない間に全く形状の違うカエルになっていたとしよう。このとき、オタマジャクシの成熟の過程を知らなければ、オタマジャクシはカエルに食べられてしまったと考えてしまうだろう。もとのオタマジャクシの同一性の十全な概念を得るためには、私はカエルの自然な成長過程を知っていて、カエルになったオタマジャクシを再同一化 (re-identify) しなければならない。人の場合も同様である。適切な人格概念は私たちの人間の扱い方に範例的にその基礎を持っている。人間はある構造を持って生まれてきて、多くの経験を経て様々な性質を身につけ大人になっていく。この性質は相互に結びつき、人格概念を構成しているので簡単に複製したり、別のものに置き換えたり、分割したりすることはできない。

つまり、彼が言いたいのはこういうことだと思われる。パーフィットは単に可能であるということから人格同士が一对多関係に立つことを認め、既存の人格の同一性概念にゆさぶりをかけた。しかし、それは私たちの言語的実践の基礎を持たないものであり、適切に想像することができない、もっといって不可能であるということだろう。私はこの批判がパーフィットの論点にはまだ届いていないと思う。パーフィットはまさにその言語的実践に挑戦しているのであり、必要があるならばその言語的実践に基礎をもつところの概念を見直すべきであると言っているのではないだろうか。

パーフィットは Parfit(1995)において人格の同一性への批判をさらに強める。この批判の要点は、時間をまたいだ人格の同一性を担保する「何か」が存在することへの批判であると思われる。彼の議論の焦点は、普通に人間が生きていくのに重要なことがら、すなわち現実に関することがらを第一とし、それ以外の観念的・言語的なことがらは二次的とするというものである。ここから、人格の同一性は観念的・言語的なものであると論じ、重要ではないと結論する。具体的な議論はこうである。

まず、パーフィットは魂やデカルト的自我を想定し人格の同一性の担保とする立場を取らない。なぜなら身体と区別できる実体としての魂やデカルト的自我は私たちが生きていく生活の中においてその存在を確認することができないからである。

そもそも、人格の同一性は現実に関する知識なのであろうか。例えば、丘の上で木が成長していて、それがある日「林」と呼ばれるようになる。「林」は現実に関する新しい知識なのであろうか。単に言葉の上だけの知識ではないのだろうか。これを踏まえてパーフィットは、私にある変化を加えて誕生した人が私と呼べるかどうかの思考実験に進む。

まず、身体的連続性による人格の同一性の検討のために身体スペクトル (Physical Spectrum) という思考実験が用いられる。身体スペクトルにおいて、私の身体の一部が正確な作りものに置き換えられる。このとき、どの細胞も置き換えられない場合、身体スペクトル実行後の人は私であるだろう。全ての部分を置き換えられた場合、実行後の人は私の「複製」であるだろう。では何パーセントの置き換えまでは私と言って、何パーセント以上の置き換えは複製になってしまうのであろうか。われわれはこの問題に答えることはできないだろう。続く思考実験として混合スペクトル (Combined Spectrum) が検討される。これは身体的・心理的要素を作りものに置き換えるというものだが、どこまでが私でどこからが別の人になるのかにはやはり答えられない。

結論として、パーフィットはある変化を経た人が私と言えるかそうでないかは単に言葉の問題であると考え。例えば、今日の私が明日までに身体的・心的にどのような変化が起こるか知っている場合、その変化を経た明日における人について「その人は私だろうか」と自問することがあるかもしれない。しかしこれは誤解をまねく言い方で、この場合はむしろ「その人を私と呼ぶのは正しいであろうか」と問うべきである。われわれは何が起こっているか (what happens) というレベルにおいて、私の身体的・心理的な同一性があることは知っている。しかし、身体スペクトルのような場合には人格の同一性に関しての答えはみつけれられない。これは、人格の同一性の問題は何が起こっているかの問題ではなく、単に言葉の上での問題であるからである。つまり、かかる実験で答えが見つけれられないのは、そのような場合の「私」という語の正しい適用の仕方がまだ定められていないからである。

では、このような人格的同一性は果たして重要であると言えるのであろうか。人格は理性的・倫理的重要性を持つと広く考えられている。これは人格が自己の未来について関心をもつ理性をわれわれに与えてくれると考えられているからである。特に倫理では人格は「倫理のための基礎的な事実」と呼ばれている。このことに関してパーフィットは私たちが生きる上で、何が重要か (what matters) についてのみ考える。何が私たちの人生を善くするかではなく、善かろうが悪かろうが何が重要かについて考える。この意味で人格の同一性それ自体はあってもなくても現実に影響を与えない。むしろ時間をまたいだ人格同士の関係において次の二つの関係が重要である。すなわち、一人の人の人生の異なった部分

同士をつなぐ心的な連関と連続である。

先の人格の同一性が理性的・倫理的に重要な意味を持つということに関するパーフィットの議論を要約すると以下のようになる。

- (1) 人格の同一性とは単に特定の他の事実の内にある。
- (2) ある事実が特定の事実の内にあるとき、理性的あるいは倫理的重要性があるのはこの特定の事実のみである。われわれはこれらの事実が重要であるか否かそれ自体を問うべきである。

従って

- (3) 人格の同一性は理性的あるいは倫理的重要性を持たない。重要なことは、人格の同一性がその内にあるところの一つかそれ以上の他の事実だけである。

すなわち、人格の同一性は私たちが生きていく上で重要な事実ではないということだ。

ここでパーフィットはマーク・ジョンストンが自身に加えた反論を引用する。ジョンストンはパーフィットの議論を下からの議論 (Argument from Below) と呼び、自身の議論を上からの議論 (Argument from Above) と呼ぶ。パーフィットはジョンストンの反論を受け、この二つの立場で回復不可能な意識喪失状態の人の生死や、人の自由意志に関する問題をそれぞれ考えたときどのような展開になるかを論じる。この人格の同一性が重要かという問題も先の人格の同一性の存在についての議論と同型である。回復不可能な意識喪失状態の人の生死についての問題でこの点を確認しておく。上からの議論では人間が生きることが重要である。それゆえ、それを構成している心臓の鼓動や他の臓器が機能していることは重要である。下からの議論では、心臓の鼓動や臓器が機能していることは端的な事実である。その事実からその人が生きていると言うことは可能であったとしてもそれは重要ではない。もしわれわれがその人が生きていると主張しても現実には何の新しい情報ももたらされない。それは単に「人」や「生きている」という語に関して言葉の上で新しい情報をもたらすのみである(Parfit, 1995, p.32)。

この「何が重要か」「現実に関何が起こるか」を重要視する自身の立場をパーフィットは「重要性に関する現実主義 (realism about importance)」と呼ぶ(ibid., p.33)。人格の同一性のような言葉の上だけの問題を現実より重要視する立場は非理性的であると彼は信じる。この立場では、人格の同一性より先の二つの関係性の方が重要である。しかし、それらは普通同時に起こる。この問題を検討するためにそれらが同時に起こらない場合を検討せねばならない。

人格が同一であるか否かは何を基準として受け容れるかに依存する。ここで、脳に基づく基準 (Brain-Based Criterion) を採用したとして考えてみよう。つまり、脳が同一なら人

格の同一性は担保されるという見解である。私が脳の病気にかかり、外科手術を受けねばならないとしよう。幸い、技術は進歩していて脳細胞の代用物は人工的に作ることができる。このとき、移植の手順として①100分の1ずつ交換する場合、②全てをいっぺんに交換する場合の二通りの場合がある。①の場合、手術後の人は私であるだろう。しかし、②の場合、別の人工物に取り換えてしまうので手術後の人は私ではないだろう。しかし、現実にかかることは同じである。すなわち、正しく私と呼ばれうるであろうし、手術前の私と同じように生き続けるであろう。ここから引き出される結論は、もし②の場合に私が何らかの意味で存在することをやめても、①の場合と比べて何ら変わるところはない。つまり、私が存在することをやめるのは重要ではない。2.1節で紹介した脳分割の事例に当てはめると、まずどちらかの脳半球だけが移植可能で、移植が成功したとするとその移植された人は私だろう（Single Case）。では、右脳左脳両方が移植に成功したとするといずれが私なのだろうか（Double Case）。両方ともが私であると主張することはできない。しかし、Single Case から Double Case に移行するにあたって実質的には何も失われていない。しかし、結果として「私」は失われているように思われる。これに対しパーフィットは「私がそこにいないことは現実的な不在（real absence）ではない」と答える。これまでの議論で私が理解する限りでは、私は数的に一なものであるという「私」という語の言葉の上だけの問題、同一性関係が定められていないという点から、Double Case の手術後の人はいずれも私と正しく呼べないのだと思われる。

以上より、パーフィットの結論はこうである。私たちは時間をまたいだ人格の同一性に関する見解を見直すべきである。重要なのは私である誰かが生きていることではなく、少なくとも今の私と心的連続がある一人の人間が生きており、かつ/またはその人が私の脳の充分な部分を持っていることである(ibid., p.44)。

つまり、パーフィットの結論は、私たちは何が現実において重要なのかを問うべきであり、もしそのようにするならば人格の同一性は重要ではないということだ。重要性の問題はさておき、人格の同一性は心的連続と連続であるという見解を受け継ぎつつ、さらに段階とその関係という形で人格の同一性に関する説明を精緻化するのが最後に紹介するデイヴィッド・ルイスの議論である。

2.4 段階説

デイヴィッド・ルイスは Lewis(1971)において人間とその身体（persons and their bodies）は同一であり、瞬間的な段階（momentary stages）の集合体であると主張する。また、Lewis(1976)においてパーフィットの人格の同一性は心的な連続と連続であるという主張

を認めつつ、生きていくのに重要であるところの心的な連関と連続を定式化する。

まず、ルイスが人格の同一性に関して擁護するのは次のテーゼである。

(T) 必然的に、ある人格がある時において一つの身体を占めるのはその人がその時点においてその身体と同一であるときかつそのときに限る。(Lewis, 1971, p.203)

このテーゼは人と身体が同一の単一実体 (simpliciter) であることを意味しない。例えば、どの人格の段階でもない死体という身体の間隔もありうるし、どの身体の間隔でもない幽霊のような人格の間隔もありうる。段階説を踏まえて(T)を解釈すると、人格 A が一つの身体を占めているとき、人格 A の段階はそのとき占めているところの身体の間隔全てでありかつそれのみであるということになる。ここで重要なことは、人格 A はわれわれが人格的統一 (personal unity) 関係と呼んでも良いような、ある関係によって関連付けられた段階で構成されており、人格 A の身体はわれわれが身体的統一 (bodily unity) 関係と呼んでも良いようなある関係によって関連付けられた段階で構成されているということである。時間を通じた人格の同一性に関して重要なのは、このうちの人格的統一関係である。ここで注意しなくてはいけないのは、段階は瞬間的なものであり持続しないため、今と未来の間隔は同一ではないということである。ここで、人格の同一性の問題は「何か」の同一性から段階の関係に置き換えられる。

ルイスはパーフィットの議論における人格的段階の間の心的な連関と連続関係を R 関係と定義する。また、あるいくつかの人格的段階が同じ持続する人 (continuant person) の人格的段階であるとき、その段階同士は I 関係にあると呼ぶ。そして、ルイスは I 関係にある人格的段階の最大和が持続する人であると考え、ここまでで明らかのように I 関係と持続する人の説明は循環している。彼はもし人格的段階に関して R 関係と I 関係が同じものであるならば、持続する人に関して循環しない定義が与えられると考える。そして、人格的段階同士の I 関係は人格の同一性ではないが持続するものの同一性の構造を反映していると考え。

まず以下で人格的段階の I 関係と持続する人の関係を定式化する。 $S_1, S_2, \dots$ が人格的段階であり、 $C_1, C_2, \dots$ が持続する人であるとし、 S_1 は C_1 の人格的段階、 S_2 が C_2 の人格的段階...とすると、 S_i と S_j が I 関係にあるのは C_i と C_j が同一であるときかつそのときに限る。I 関係は対称的であるが、R 関係は向きを持つので I 関係を R 関係で記述すると S_i が前向きに S_j と R 関係にあり、 S_j が後ろ向きに S_i と R 関係にありかつ同じ C の段階であるとなる。

次にルイスはこの R 関係を用いて脳分割 (分裂) の事例を検討する。分裂前の人格的段

階を S_1 、分割後の二つの人格的段階を $S_{2,1}$ 、 $S_{2,2}$ とすると S_1 と $S_{2,1}$ は $S_{2,2}$ は前向きにも後ろ向きにもR関係にあり同時にI関係にある。ただし、 $S_{2,1}$ は $S_{2,2}$ はR関係にない。すなわちこの場合にはR関係は（同様にI関係も）非推移的である。ここで注意しなくてはいけないことは、ある人格的段階 S は2人以上の持続する人の段階の一部でありうるということである。持続する人はI関係にある人格的段階の総和であるため、過去あるいは未来に他の持続する人と段階を共有することを許容する。ルイスはI関係が非推移的になるのは、ある時点で持続する人の段階の一部が重なって存在するときでありかつそのときに限るとする。この点がI関係と人格の同一性が異なる点である。

次にルイスが問題にするのは心的な連続性が徐々に薄れていくという問題である。ここからパーフィットの心的連関と同様に、R関係とI関係には度合があるとルイスは論じる。例として挙げられるのがとても長生きする人の話である。メトセラはとんでもなく長生きであるが、137年しか記憶も意志も持続しないでしょう。すると20代の彼と170歳の彼はほとんど別の人になってしまうと言うことができよう。これをR関係を用いて表現すると二つのメトセラの人格的段階が一人の持続する人に属するのはその二つの段階が137年以下しか離れていないときかつそのときに限る、ということになる。この例が示唆するのは人格の同一性が度合の問題（matter of degree）でありうるということである。同一性は度合の問題ではありえない。しかし実際の人間が生きていて自分をどう認識し、他者にどのようにふるまうかという人格性（personhood）は度合の問題だからだ。先の定義では明確な区切りを設定したが、この人格性は時間とともに徐々に薄れていくと考えるのが現実的であろう。すなわちメトセラの100年隔てた段階同士は彼が持続して生きているのに疑いがないほど高いR関係にあり、200年隔てた段階同士は生きていくのに重要なことがきれいになくなってしまふほど低いR関係にしかないのだ。ここから、ルイスは人格の同一性は生きていくのに重要になる程度の心的な連関と連続でありうる」と論じる。

3. まとめ

以上、人格の同一性に関する議論を魂あるいは身体が担保するという説、同一性は関係概念であるという認識のもとに展開されたパーフィットのIdentity不要説、ルイスの段階とそれらの関係によるという分析形而上学の議論を順に見てきた。人格の同一性をものの同一性と同様、「何か」同一なものがあり、それが人格の同一性を担保するものがあるという視点から同一性は関係概念であるという視点の転回を紹介した。人格の同一性が関係概念であるというのは、関係がまずあり、そこに人格と呼ばれるような心的に連続した何かが見出されるということだと私は理解した。この転回は、いかに私たちが人格を持ち存在

する人間であるのかを説明する探求に重要な示唆を与えるものであると私は考える。

文献

- Gillett, Grant (1987). 'Reasoning about persons', *Persons and personality: a contemporary inquiry* (pp.75-88), New York,: B. Blackwell.
- Harré, Rom (1987). 'Persons and selves', *Persons and personality: a contemporary inquiry* (pp.33-55), New York: B. Blackwell.
- Harris, Henry (1995). 'An Experimentalist Looks at Identity identities', in *Identity: essays based on Herbert Spencer lectures given in the University of Oxford* (pp.47-63), Oxford: Oxford University Press.
- Lewis, David (1971). 'Counterparts of Persons and Their Bodies', *Journal of philosophy*, 68, 203-211.
- (1976). 'Survival and Identity', in A. Rorty (Ed.), *The Identities of Person*, Barkley: California.
- Parfit, Derek (1971). 'Personal Identity', *Philosophical Review*, 80, 3-27.
- (1987). 'A response', *Persons and personality: a contemporary inquiry* (pp.88-98), New York: B. Blackwell.
- (1995). 'The Unimportance of Identity', *Identity: essays based on Herbert Spencer lectures given in the University of Oxford* (pp.13-45), Oxford: Oxford University Press.
- Wiggins, David (1987). 'The person as object of science, as subject of experience, and as locus of value', *Persons and personality: a contemporary inquiry* (pp56-74), New York: B. Blackwell.
- Williams, Bernard (1973). 'Personal identity and individuation', *Problems of the self: philosophical papers, 1956-1972* (pp.1-18), Cambridge University Press.
- (1995). 'identity and identities', *Identity : essays based on Herbert Spencer lectures given in the University of Oxford* (pp.1-11), Oxford: Oxford University Press.
- Swinburne, Richard (1987). 'The Structure of the Soul', *Persons and personality: a contemporary inquiry*, (pp.33-55), New York: B. Blackwell.
- Terence Cave (1995). 'Fictional Identities', *Identity: essays based on Herbert Spencer lectures given in the University of Oxford* (pp.99-127), Oxford: Oxford University Press.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕